

地域研究と情報学

柳澤 雅之 京都大学地域研究統合情報センター



大学院事務長のムハンマド・ナシル先生、TDMRCセンター長のデイルハムシャー先生ならびにご列席のみなさま、津波から7周年を迎え、今後の復興に向けた大切な一步になるこのメモリアルな場で、みなさんとこのように意見交換できる機会を与えられたことに感謝いたします。私は柳澤雅之と申します。京都大学地域研究統合情報センター（地域研）に所属していて、地域情報学プロジェクトの代表をしております。今日は地域情報学プロジェクトを代表して、地域研究とは何か、地域情報学とは何かについて、短くお話ししたいと思います。

■ 地域研究とは、地域社会とグローバルな変化とをつなぐ学問分野

まず、地域研究とは何かについてお話しします。一言でいいますと、「地域社会で起こっている事柄をベースにして、グローバルな課題に答える学問分野」だと考えていただければいいと思います。それは、これまでの欧米諸国の目的に合致した世界各地の地域社会の研究から、欧米の論理を相対化して、多様な地域社会の共存を可能とする新しい地域社会の研究へとシフトしている学問分野であるともいえます。

では、この地域研究がどのような歴史的経緯のもとにできてきたのかを短く説明します。そもそも、植民地化した国、あるいは今後植民地化しようとしている国の資源や社会のようすを知るために地域の研究が必要とされました。たとえばインドネシアやアチェの資料がオランダ東インド会社の資料としてもたくさん残されていますし、フランスでは熱帯諸国の植民地で得た資料をもとに熱帯地理学が発展しました。私たち地域研の資料の一つである英国議会資料(BPP)からも、当時イギリスが植民地とした国の膨大な資料を探ることができます。

そのような植民地研究が、第二次世界大戦後は戦後の冷戦構造下で、敵国あるいは同盟諸国の政治・経済分析のための学問として、とくにアメリカで発達しま

資料1-1 地域研究の特徴と課題

1. 社会・文化・自然を取り入れた学際的研究。分野を横断する複合的な問題群への対応が可能。
2. 地域社会から現代的でグローバルな課題を考える。人口増加や高齢化、地方分権と中央政府の役割、環境問題、開発といった現代的でグローバルな課題が顕在化するのはいずれも地域社会である。地域社会の現場から考える。
3. 地域の固有性を尊重した新しい世界を構想する。欧米の発展径路を相対化し、多様な地域社会をベースにした新しい世界を構想する。

した。しかし1960年代から70年代にかけて、国際的な技術支援や国際関係の変化が起こるなかで、地域社会そのものの理解を目的とした学術的な分野として地域研究が確立していきます。これは、それまでの支配の方法を前提とした欧米中心の見方がどんどん廃れることにつながります。また、1980年代、とくに後半以降ですが、グローバル化が進展するなかで、地域社会とグローバルな変化とをつなぐための学問分野として地域研究は新しい展開をはじめました。

■ 地域研究の三つの特徴と対応できる課題

このような特徴をベースにして、どのような課題に地域研究が対応できるかについてお話しします。第1の特徴は、地域の社会・文化・自然をすべて取りこんだ学際的な研究であるということです(資料1-1)。学際的な研究であるからこそ、分野を横断するような複合的な課題に対応することが可能です。たとえば環境問題でも、自然を保護すること、地元の人たちの生活を守ること、そこにある資源を使うこと、そこにいる人たちの慣習を守ること、このようなことをすべて考えたうえで、地域研究は環境問題に取り組みます。

二つめの特徴は、地域社会から現代的でグローバルな課題を考えることにあります。たとえば、災害発生時の現場である地域社会がどのように対応したのか、その後の復興をどう構想するのか、復興を実現するま

資料1-2 「地域の知」の横断検索の例

1. 異なる地域や生態系の中で農村の人たちが培ってきた自然利用に関する知恵を横断的に検索・利用可能とし、統合的な自然利用と考える。
2. 地方政府や中央政府の役所が個別に管理・所有する住民資料を横断的に検索・利用可能とし、知恵を蓄積する。
3. 図書館、博物館、大学などが個別に所有する研究資料を横断的に検索・利用可能とし、統合的な研究をする。
4. 異なるformatの画像・映像・文書・数値等の資料を横断的に利用する。

でのプロセスをどう一般化しグローバルな課題として他の地域に役立てるのかを考えるのも地域研究の課題のひとつです。

地域研究の三つめの特徴は、地域の固有性を尊重した新しい世界を構想することにあります。地域研究では、欧米の発展プロセスを相対化して多様な地域社会をベースにした新しい社会を構想します。

このような地域研究を進めるひとつのアプローチとして、地域研では地域情報学を構築してきました。地域研究がこれまでに蓄積したいろいろな地域の知恵や経験に関する情報があります。また、地域が自立的に活動するようになり、地域社会自らが自分の地域の知恵や経験を蓄積するようになってきました。こうして、情報学の技術と考え方を応用して、「地域の知」を集積し、横断的に検索・利用できるようつなぎ、そのつないだ「地域の知」をグローバルに役立てると同時に地域にも役立てる。地域情報学ではそのようなことを

目的としています。

■ 地域のことを知り、共感する力をもって新しい世界をつくるのが地域研究の役割

資料1-2は地域情報学でしようとしていることの例です。一つめは、異なる地域や生態系のなかで農村の人たちが培ってきた自然利用に関する知恵をつなぎ、統合的な自然利用を考えることです。二つめは、地方政府や中央政府の役所が個別に管理する住民の資料をつなぎ、知恵を蓄積することです。三つめは、図書館や博物館、大学などが個別に所蔵する研究資料をつなぎ、統合的な研究をすることです。四つめは、画像や映像、文書資料、数値などのさまざまなフォーマットの資料をつないで、利用を可能にすることです。

このほかにも、さまざまな情報をつなぐことができます。このような情報をつなぐことで、地域のことを知り、共感する力をもって新しい世界をつくること、それが地域研究の役割です。